
月想譚

一条夕日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月想譚

【コード】

N07070

【作者名】

一条夕日

【あらすじ】

遣唐使を題材に創作した、男女の一幕を綴った作品です。

夜空には月が輝いていた。

澄み渡った空気は微かな熱気を帯びていたが、湯上りの肌を涼ませるには丁度良く、蓬明は夜着の衣一つを身に纏った姿で庭へと足を運んでいった。沓に通した脚が砂利を踏む。鳴くのは小石と鈴の虫。ただ姦しいばかりの蝉とは違い、情緒のある鈴の音は耳に心地よく、季節の移ろいが深まってきたことを感じさせられる。

暫く漫ろに庭を歩いていた蓬明は、やがて瓢箪型をした池の窪みに架けられた太鼓橋の中程に月を愛でる男の姿を見つけた。彼の者は東方の島国から訪れたという客人である。年齢は壮年期を迎えた頃合いだろうか。口元に薄く髭を蓄えた風貌は実に精悍だが、それは勇猛さを窺わせる動的な逞しさではなく、秀でた知性を匂わせる静的な力強さを醸し出している。しかし、憂いを帯びた眼差しで中天を望む様は親と逸れた幼子のように心許ない。事実、三度に渡る航海で故国への帰郷を果たせなかった彼は底知れない孤独に苛まれているに違いなかった。

また、あの人は月を眺めている。蓬明は複雑な心境を隠さぬまま男に歩み寄っていった。男は余程深く感慨に耽っているのか、蓬明が橋梁の袂を越えても視線を寄こすどころか、存在に気付く様子さえない。

「良い月ですね、乾蓮」

隣に並んだ蓬明が声を掛けると、男 乾蓮の双眸が僅かに見開かれた。希薄な驚愕の反応。それも一瞬にして平静な表情に上塗りされ、乾蓮はゆるりと首を捻って蓬明を見下ろした。

「また、そのような格好を……身体を壊しますよ、蓬明」

「湯に浸かったばかりですから、これで丁度良いのです」

「……全く、懲りない方だ」

呆れたように嘆息した乾蓮は脱いだ上着を蓬明の肩に被せた。生

温かい空気とは異なる温かさが背中に溶けていく。蓬明は上着の端を握り締め、この温もりをしつかりと抱き寄せた。そして、再び月に目を遣った乾蓮に問い掛ける。

「月ばかりでは、飽きませんか？」

この問い掛けに俯いた乾蓮は目を伏せ、数瞬の黙考を経て再び夜空を見上げた。

「もう十年以上も昔のこと、話に伝え聞くだけだった遠き異国の地を踏んだ私は、全てが異なる景色の中で空だけは故郷と同じであるのだと知りました。とうに褪せた記憶しか持ち得ない私の慰めとなるのは、この空を於いて他にはありません。おそらく、私が月に飽くことも決してないでしょう」

「そうですね……」

予想はしていたが、望ましくはない返事。今度は蓬明が俯いた。

手摺の奥には月が揺れている。水面上に静かな光を湛え、波紋と共に醜く^{たわ}撓み、静寂と共に美しい満月に還る。

かつては不朽なる美の貴さに憧れた。

けれど、今は

「蓬明は月が嫌いですか？」

「嫌いです。月も、空も、全部消えてしまえばいい」

最初は淡々と、次第に絞り出すように告げ、蓬明は乾蓮を見上げた。

「乾蓮、貴方の望郷の念は命を賭すに足る理由なのですか？」

短い言葉に万感を込めて問い質す。その悲愴な声音に胸を打たれたのか、乾蓮の身体は今宵初めて蓬明と向き合った。しかし、蓬明に掛けられる言葉はない。乾蓮は黙って頷き、謝意を伝えるかのよう^よに目を伏せると、踵を返して蓬明の下を立ち去った。

滔々と頬を伝う涙を夜風が拭う。

夜空の月は泣き崩れる女を静かに見下ろしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707o/>

月想譚

2010年10月10日19時23分発行